

二〇一七年度公開講座

秋成文藝の魅力

——小説・和歌・俳諧——

近衛典子

江戸時代中期の作家、上田秋成は『雨月物語』や『春雨物語』でよく知られているが、それだけにとどまらず様々なジャンルの多様な作品を残している。今回は、恐らく普段あまり読まれることのないであろう作品を紹介しつつ、秋成の幅広い表現世界や面白さを読み味わっていただきたい（秋成の生涯、略）。

一、学問と遊び——『痴癡談』の世界——

最初に取り上げるのは『伊勢物語』とそのパロディである。秋成は国学者でもあったから、『源氏物語』や『伊勢物語』、『万葉集』など古典作品に強い関心を持つており、『伊勢物語』についても『よしやあしや』という伊勢物語論を出版している。ちなみに秋成の学問について、漢学は恐らく懐徳堂で学び、国学は賀茂真淵門の江戸の加藤宇万伎に学んだとされるが、ともかく、大坂堂島の裕福な商家の跡取り息子として、仕事の合間に、曲がりなりにも学問に親

しんだと思われる。そこで、まずは『伊勢物語』第二十三段を読んでみたい。

(前略) さて、年ごろ経るほどに、女、親なくたよりなくなるままで、もろともにいふかひなくてあらんやはとて、河内の国、高安の郡に、いきかよふ所出できにけり。さりけれど、このもとの女、悪しと思へるけしきもなくて、出しやりければ、男、異心ありてかかるにやあらむと思ひ疑ひて、前栽の中に隠れゐて、河内へいぬる顔にて見れば、この女、いとよう化粧じて、うちながめて、

風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらん

とよみけるを聞きて、限りなくかなしと思ひて、河内へも行かずなりにけり。

まれまいかの高安に来て見れば、始めこそ心にくも作りけれ、今はうちとけて、手づから飯がひ取りて、筈子のうつわ物に盛りけるを見て、心うがりて行かずなりにけり (後略)

夫の浮氣を知りながら快く送り出す妻に不審の念を抱いた夫が、出かけたふりをして密かに妻の様子を窺っていると、そうとは知らない妻は身だしなみを整え、外出していく夫の身をひたすら案じている。妻の心根の美しさに感動した男は、いとおしくなつて浮氣を止めてしまつたというのである。それでもやはり浮氣の虫が騒いで相手のところへ行つてみると、すっかり気を許した女は、自らしやもじを手にしてご飯を盛るという、平安朝の貴族からすれば考えられないような品下る姿を見てすっかり幻滅してしまい、もう通わなくなつてしまつた、という訳である。
さて、次にこれを踏まえた秋成作品を、作品解説は後回しにして、まずは読んでみよう。

「こころよし」とはおもひもの
の事、鈍太郎という優曲に、
下京の「こころよし」といへ
り。

たてこされの、たては、俠
者をたて衆といふより転じ
て、たてのぼしなどいふと、
ひとつ意なり。

むかし、人のつままりけり。その男、外^このころおほき癖ありて、夜^ごとにいづちとも
知らず、うかれありきけり。さりけれど、この女、いささかもうらみたるけしきなく、小
袖^{さしもの}帯鉤まで、とひ求めつゝ、出だしたてやりけり。男、ふと心づきて、もし、二^二一^一二
ろありてや、と疑ひつきぬるより、例の「こころよし」が方へ行くふりして、せんざいの廁
のうちに隠れて、窺うほどに、この女、かかりけりとも知らで、いと嬉しげに、男のい
でしままに、はした女を呼びて、耳に口つけて物言ひければ、うけたまはりていで行き
ぬ。さればこそ、ふたごころあるなれ。猶見あらはさばや、とよく忍びてあるほどに、し
ばしして、はした女のしりにつきて、男の入り来たるを見れば、常に参れる、八百屋の
翁なりけり。なにやらむ物うち入れたる籠わき挟みて、つと入り來たる。あなあさまし、
年は六十にこえ、歯落ちかしら禿げ、すす鼻垂れたるを、これに見かへられぬる事の、い
と口惜しく、さあれば、いかにすらむと猶堪へ忍びつつ見るに、あなこころう、恋する
にはあらで、そこを焚け、かしこに炭つけ、とののしりつつ、俎板の音にぎはしく、鍋
どころあまた、めうめうと湯煙たちて、うまくさき匂ひの、ここにまで薰りて、あるじ
の女、うちほこりつつ、手づから飯ヒとりて、盛り喰らふありさま、あまりにうちとけ
て、いとあさましく、つと出でんにさへ、あぢきなく、風ふけば沖つ白波、たてこされ
てはならぬ、と心づきしより、其後は、夜^ごとに、いでありかずなりにけり。

一読してすぐわかるように、『伊勢物語』をなぞりながら、ものの見事に笑いの世界に転じている。『伊勢物語』では妻の浮氣を疑つた男が見たのはひたすら自分だけを愛してくれる妻、ところが何と、こちらは男が登場する。さては浮氣か、とショックを受けつつ尚も凝視していると、さにあらず、夫の留守中に妻は贅沢三昧、夫が普段食べたこともないようなご馳走を食べているのであつた。自分の留守をいいことに妻が好き放題していると知つた夫は、そうはさせじと浮氣を止めた、という、とんでもない現実感あふれる話になつてゐる。『伊勢物語』を熟知した読者にすれば、二段構えのどんでん返しになつてゐるのである。また、『伊勢物語』で男が垣間見するのは「前栽」の陰からだつたが、こちらは「前栽の廁」の陰からであり、また、八百屋の翁を見た男が敗北感に打ちのめされるのも、いかにも庶民的で卑俗な近世的世界である。決して上品ではないが、良くできたパロディである。

さて、この作品は『癪癖談』である。これは「クセモノガタリ」とも「カンペキダン」とも読む。作品名が定まらないのは奇妙だが、秋成が序文で、どちらでも好きな方で呼んでよい、と書いている。「クセモノガタリ」、これは『伊勢物語』の「イ」を「ク」に換えただけの、まさに「もじり」である。もう一つの「カンペキダン」、この「カンペキ」というのは、秋成の癖の強い気難しい性格に由来している。そしてこの気難しい性格を「癪癖」、つまり「無くて七癖」のいわゆる「癖」の一つである、として、その癖に任せて書かれた書、という意味なのであろう。

秋成ははじめな『伊勢物語』研究の傍ら、こんな戯れをしているのである。この作品は、実は意外に凝つていて、これ以外にも『伊勢物語』研究との強い関わりがある。まず一見してわかるのが、上段下段に分かれているという形で、これはいわゆる注釈書の形のパロディである。例えば最初の注「こころよしとはおもひものゝ事、鈍太郎」という優曲に、「下京のこころよし、といへり」は、本文中の「こころよし」という言葉が狂言「鈍太郎」に出典を持つ、とふざけて注釈しているのである。つまりこれは、古典研究書の頭注の形のパロディとなつてゐるのである。また、こ

の作品が二つの名を持つといふことも、『伊勢物語』に倣つてゐる。今『伊勢物語』と呼ばれる作品は、かつて『在五
が物語』や『在五中将物語』など、別の名で呼ばれたことがあつた。秋成は、こんな点までも踏まえて遊んでいるの
であり、遊びになぜこれほどエネルギーを使うのかと思う程である。

この『痛癖談』は寛政三年（一七九一）、秋成五十八歳頃、淡路庄村隱棲時代に成立した。秋成生前は写本で回覧され、回覧の過程で成長していった物語と考えられる。没後十三年を経た文政五年（一八二三）、門人らによつて刊行された。

実はこの作品、今の一段を読んで期待して読むと、がつかりするかもしれない。見てきたような気の利いたもじりは他にはほとんどないのである。中心となつてゐるのは堕落した今の世の中への批判である。現在の世相に痛癖を募らせ、痛烈に指弾するのである。ところが最終段に至つて突然、趣が変わる。さんざん人の悪口を言い募つてきた男、これは秋成自らの戯画と目されるが、この老人が最後の最後になつて逆に厳しく批判されていくのである。批判の主はこの男の家庭に飛んできた二羽の鳥である。鳥のいわく、この老人はこの世で何をして働くでもない、生きる甲斐のない人間だ、それなのに、心が狭くて、いちいち世の中のあり方に怒り、昔は良かつたと愚痴を言い、自分だけは正しいと思い上がつてゐる。でもそれが世の中というものなのだから、致し方ないではないか、というのである。

『痛癖談』の中で、この最終段だけは秋成研究の中で繰り返し取り上げられてゐるが、それは秋成が不甲斐ない自分を戯画化し自嘲しているといふこと、それが晩年の秋成の苦悩と一脈通じるといふことからであろう。そういうことであつて、この『痛癖談』は暗い色合いの、苦悩に満ちた作品であると捉えられることが多いようと思われる。

ところが、どうも同時代人にとってはそうではなかつたようなのである。現代の我々にとつては訳のわからない作品であるが、当時の秋成周辺の人たちにとつては、爆笑するぐらい面白かった、らしいのである。なぜなら、『痛癖談』

がモデル小説だったからである。この作品は秋成生前は写本で知人間に回覧、つまり回し読みされていた。そして秋成没後に門人によつて出版されたが、その際、門人森川竹窓による序文が付け加えられた。その序文は秋成に宛てた書簡の形式で書かれており、ここに「とても面白かった」と書かれている。「噂のくせものがたりを借りてゆっくり拝見した。あの人この人を目の当たりに見るかのようで面白く、飽きることなく繰り返し読んだ」というのである。モデルの名前は伏せてあるものの、「これはあの人、これはその人」とわかれば、それは抱腹絶倒であろう。「をかし男ありけり」の男が、あの人、と具体的に思い浮かぶ訳であるから。

秋成の愉快な点は、単にまじめに勉強するだけでなく、その学問を踏まえながら「遊んでいる」というところである。しかし、実はこれは秋成に限つたことではなく、学問と遊びが渾然一体となつた独特の文化が、宝暦・明和頃、つまり秋成二十代から三十代頃にかけての大坂に花開いていたようなのである。この独特的雰囲気は中村幸彦によって「大坂騒壇」と名付けられた。学問と遊びが渾然一体となつた仲間内の文芸的サークルが成立し、秋成はその一員として活躍していたと思われる。この文化圏では、漢詩文や和歌などの学芸と遊びが一体となつて笑いを生み出し、それをお互いに鑑賞するという、大いなる才能の浪費があった。その馬鹿馬鹿しくも愉快な遊びに興じる若旦那たちの中に、秋成もいた。そういう仲間の姿を、後年になつて、面白おかしく、毒を込めて書いたのが『痴癡談』だつたと言つていいであろう。その樂屋落ちの面白さは、その文化圏にいる人々にしか通じないものである。

そのあり方を逆接的に浮かび上がらせているのが、幕臣で村田春海門の江戸の国学者、小林歌城おばやしおとぎの事例の存在である。歌城は『痴癡談』の欄外に、モデルが誰であるか書き留めている。これはまさに『伊勢物語』のあり方と同様である。『伊勢物語』において、ただ「女」とだけ記された人物が、実は二条后高子であることなどが、いつか、誰かの手によつて書き加えられているが、それと同じことである。そのサークル外にいる者が、面白さを共有したくて、ど

これからか情報を得て、それを書き留めたのであろう。

ところで、秋成の古典を踏まえた遊びは『癪癖談』にとどまらない。同様の例として『万葉集』を踏まえた狂歌集『万句集』がある。これは書名もさることながら、序文の署名を、あろうことか秋成の国学の師、加藤宇万伎の名前をもじつて「刈菰知万伎」としている。これについて、秋成が敬愛してやまない宇万伎先生をこのように茶化すなど考え難い、として秋成作を疑う説もあるが、私は秋成ならやりかねないと思っている。と言つても、先生を侮る気など全くなく、ただ悪ふざけしているだけなのである。生まじめな宇万伎先生を尊敬するからこそ、ついつい茶化したくなる、いわば愛情の裏返しなのではないかと思う。こういった、真剣な学問とその知識を使つた遊びが両立するところ、学問と遊びが切り離されず、その雅と俗とを往還するところに、大坂騒壇の騒壇たる由縁があるようだ。

そういった市井の人々の生み出す自由闊達な文芸のありよう目にを見張つたのが、広島藩儒であつた頼春水である。頼山陽の父で、のちに江戸の昌平黌でも教鞭を執つたまじめ一方の学者であるが、若き書生時代、大坂の混沌社に属し、澁瀾とした青春の時を過ごした。彼が後年、大坂時代を懐かしんで書いた『在津紀事』一〇九段を見てみよう。

浪華市井の人往往々文墨を弄す。而してその詩文多く誦讀するに足る。その他風流好事を以て世に名ある者、亦た少からず。蒹葭堂木世肅の如きはその選なり。（中略）京及び江戸市井の人、則ち恐らくは浪華の文に如くこと能はざらん。

つまり、大坂では普通の人がよく文雅に通じており、京や江戸を凌ぐ、それらとは全く別の興趣を持つていた、と素直に評しているのである。

秋成はまさにこういった時期の大坂で若き日々を過ごしていた。しかし、やがてその風は薄れていく。次の世代の若者たちは、今や失われた輝かしき文化、互いの才能を競い合い、無駄に学識を蕩尽していたかつての輝きを、憧れをもつて眺めていたことだろう。先ほどの『癪癖談』の序文を書いたのは、そのような、一世代下の門人であった。

彼らが秋成の十三回忌に、秋成を偲ぶ記念の出版物として選んだのが、晩年の傑作『春雨物語』でもなければ和歌のアンソロジーでもなく、この『癪癖談』であったということは、改めて考えるべきことではなかろうかと思う。周囲の誰彼を素材にして思い切り毒舌を吐く、面白くて痛快な秋成、しかしその一方で、密かに我人生を恥じる心弱い秋成。弟子たちは、こういう秋成の心をよく理解していたと思われる。彼らにとつて最も秋成その人を思い起させる作品、それがこの『癪癖談』だったのではないだろうか。

二、小沢蘆庵と秋成

さて、少々深刻になつたが、次に、打つて変わつた秋成の姿を見ていきたい。次に取り上げるのは、和歌の世界。秋成の交流関係を辿りながら、和歌や和文を見ていきたいと思う。まずは小沢蘆庵と秋成である。

現代において秋成は小説作家と認識されているが、秋成が世を去つた当時は歌道の達人と称されていた。秋成の歌道における履歴はよくわからないが、二十四歳以前に下冷泉家に入門したのが最初、と私は考へている。しかしその指導に飽き足らず、独学の末に、独自の境地に至つたものと思われる。自らの心の赴くままに自由に詠む秋成の和歌は当時、わかりにくいと悪口を言われているが、この秋成の和歌を高く評価したのが小沢蘆庵という人物である。蘆庵は「ただこと歌」という新しい理論を提唱した。「ただこと歌」とは、和歌は言葉を飾らず、日常生活における率直な思いを分かりやすい言葉で詠むべきだ、という主張である。この蘆庵の主張するところを、秋成は実践で応えた、

と言つたらよいであろうか。ともかく、秋成が六十歳を過ぎて初めて出会つた二人だが、すっかり意氣投合して水魚の交わりを結んでいる。

最初に取り上げる作品は『文反古』（文化五年刊）より、秋成が京都へ来た翌年、南禅寺山内に引っ越した際の二人の応答である。

栗田山のふもとのやどりを、瑞龍山中の何某の庵に住かふる時、たよりにつきて、蘆庵のもとへいひやる

かしこの人のいざと云に、今日あはただしく移ゆきぬ。道のほど近くなりぬれば、御暇には訪はせ給へ。すきがましくはあらねど、少し広きがよしと也。垣のもとを過る谷水の音のさやけきがめづらし。是は最勝院の滝の末にて、けがれなしと云。纓おますばかりにはあらねど、夏来たらば、御足洗ひて遊ばせ給へ。

山に入かしこきあとにならはずもうき世の道にまよひてぞこし

蘆庵翁かへし

われも世にまよひて入し山住よいざ身のうさをともにかたらむ
なほたいめに。よろづは。

時々來たまひては

ひやかなる谷水をさへ庭にみてねたくぞおもふ夏の山かげ
かへし

ねたきてふかご」とながらもうとむやと、心ひやせる庭の谷水

京都の方には言うまでもないが、南禅寺には清らかな小川が流れている。秋成は煎茶道でも名を成した人で、下戸であつた秋成の楽しみは一服のお茶だったので、清らかな水は何より嬉しかったようである。手紙は、南禅寺の知人にお招かれて慌ただしく引っ越した、近くなつたのでは非遊びに来て下さい、という内容である。「纏りますばかりにはあらねど、夏来たらば、御足洗ひて遊ばせ給へ」は、中国の故事「世の中が清くなれば、仕官するため纏（冠の紐）を洗い、濁つた世の中なら、足を洗う」『楚辞』『漁父辞』を踏まえ、冠の紐を洗う程ではないけれど、この清らかな水で足を洗つて夏の暑さを癒して下さい、ということである。「山に入る賢き跡にならう、つまり出家する」ということでもないが、「浮世の道に迷い迷つて辿り着いた」という秋成の歌に対して、蘆庵も「私も同じです。ともに語り合いましよう」と返し、あれこれ話したいことがあるが、それは対面の上で、と付け加えている。

続いて、南禅寺に住んでからの蘆庵とのやりとりである。時々訪問してくる蘆庵がある時、「暑い夏に、こんなヒンヤリした水さえ庭に流れる山陰で過ごせるなんて妬ましい」と歌つたのに對し、「妬し」という言葉にこと寄せて「妬ましいなんて言葉の綾だとは思うものの、本心では私を疎ましく思つてはと思うと、心がヒンヤリする」と返している。二人の息の合つた応答が窺える。

次に紹介する、同じく『文反古』に載る次の応答は、二人の緊張感が伺えて面白いものである。

年の暮には、蘆翁より、れいに炭切でおくるるに、

寒さいやましにこそなり侍れ。いよよ平らかにおはすや。あの月の中頃より、さむかぜに吹しかれて、今に起

きもあがらずて、みづからはえまうでず、人してとひ奉る。

すきまかぜ身にしむ老の末のやまこす月なみもしばしとぞなる

返し

御たがひに、山陰の寒さを、すきまの風に煩はせたまらとや。ややをこたりさまにと、使の人に承りぬ。いと喜ぶべし。猶よくいたはらせたまへ。こゝにもおぢうばら、かたみに悩みがちになむ。賜はりしは、夜ひるのともにうちくべて侍らん。またありその「石花貝」、故さとのなつかしきには、何も何もいとかたじけなく奉りぬ。

此ごろは、

なべて世の冬にこもれる宿ならばのどけき春の日影またまし

また御こたへまでには、

かきたれし老のしはすの年波は末の山をも越ゆといそ聞け

此おくれし哥は、すみすいしと云詞を、句ごとにいただきてと、後に思ひ知りて、いと恥あるいとこ
思へりしかば、独り」とに、

過うしやみちのく山の末の松こす年なみはしきなみにして

蘆庵は例年、お歳暮として秋成に暖房の燃料である炭を贈っていたが、この冬は体調を崩して自ら赴くいふ叶わず、代理の者に炭を持たせて秋成を訪わせた。蘆庵の「すきまかぜ身にしむ老の末のやまこす月なみもしばしとぞなる」という和歌は、『古今集』の「浦ちかく降り来る雪は白波の末の松山越すかとぞみる」(326)などを踏まえ、「すきま

風が身に沁みる老いたこの頃、今年も残すところ僅かとなりました」という挨拶の歌である。

これに對して秋成は、蘆庵の体調が快方に向かっていることを喜び、自分たち夫婦も病気がちだが、いただいた炭で暖かくして過ごすつもりだと言い、また、同時に蘆庵から贈られた牡蠣に故郷を懐かしみ、厚い感謝の念を表している。秋成の和歌「なべて世の冬にこもれる宿ならばのどけき春の日影またまし」は、「世の中みな冬の寒さに家に閉じ籠もつている時節なら、のどかな春の日を待ちましよう」という意味であろう。また蘆庵の和歌への返歌として、「かきたれし老のしはすの年波は末の山をも越ゆとこそ聞け」、すなわち「老いての年末の年波は末の山までも越していくでしよう」という和歌を返している。

ところが秋成は後になつて、ひどく後悔した。実は、蘆庵から贈られた和歌は折句で、「すきまかぜ身にしむ老のすゑのやまこす月なみもしばしとぞなる」と、各句の句頭に「すみすこし（炭少し）」の語を忍ばせた洒落た和歌だったのである。蘆庵の仕掛けを見逃してしまったことを恥じた秋成は、同じ言葉を折句にして「すぎうしやみちのく山のすゑの松こす年なみはしきなみにして」（通り過ぎにくいものだ、陸奥の末の松山を越す年波は後から後から寄せてくるので／この年末を過ごすのはなかなか難儀なことです）と、独り言に詠んだという。今さら蘆庵に言えない、という訳であろうか。

しかし、ここは秋成、やはり黙つていられず、翌日に蘆庵に手紙を送つてゐる。蘆庵の歌文集である自筆本『六帖詠藻』（小沢蘆庵自筆六帖詠藻 本文と研究）（和泉書院、二〇一七）所収）冬五を見てみよう。

（前略）くるつあした同じ人のもとより、老婆、文もてきたれり。きのふたまはせし御歌、炭少しと聞えさせしを、れひのあはただしきさがに見あやまる、いと恥ある事也。けふまた聞こえぼうたておぼすらんとて、此れう紙、

比^ハるの手すさび也。見せ参らす。御心とじまらば又も奉らん。名はふとしもつけたる也（大徳寺寸松院什物、

貫之料紙懐紙、名、青雲紙。色紙、七枚来〔頭書〕）

瀬は渕といく度かはる憂き身かなむかしをのみもしのぶなみだに（11280）

冒頭の「同じ人」は秋成のことである。秋成から届いた手紙には次のように書かれていた。「昨日お送り下さった和歌は「炭少し」と折句になつてゐるのを、例の粗忽でつい見過^{ハシメテ}し、お恥ずかしいことです。今日また返歌を申し上げてはみつともないとお思ひになるかと思い、代わりにこの料紙、これはこの頃の手すさびですが、お見せ申し上げます。もしお気に召したら、また差し上げます。名は、ふと思ひ立つて付けたものです。（大徳寺寸松庵の什物、貫之料紙懐紙。名、青雲紙。色紙、七枚來たる〔頭書〕）。そして、「瀬は渕といく度かはる憂き身かなむかしをのみもしのぶなみだに」（飛鳥川ではないが、瀬が渕にいつたい何度変わるつらい身の上であろうか。昔ばかりを偲ぶ涙で（涙の渕となつて））という和歌が添えられていた、と言う。

さて、皆さんお気付きであろうか、この和歌が折句となつてゐることに。「瀬は渕といく度かはる憂き身かなむかしをのみもしのぶなみだに」、つまり「せいうむし（青雲紙）」の語が隠されているのである。手紙の「名はふとしもつけたる也」の言葉は伊達に書かれている訳ではなく、秋成からの謎掛けだったのである。はたして蘆庵は気付いたかどうか。

このように、秋成と蘆庵は折りに触れて和歌を詠み交わし、和歌を通じて互いの力量に敬意を払い、また人間的にも固い友情に結ばれていたのであつた。

三、正親町三条公則と秋成

同じく和歌を介した交流の一例目として、秋成と正親町おおぎまち三条公則との関わりを見ていただきたい。公則は公卿に列せられる身分の人物だが、秋成の国学上の門人である。安永三年（一七七四）生。寛政八年（一七九六）に参議、寛政十一年（一七九九）に権中納言に任せられ、順調な人生を送っていたが、寛政十二年（一八〇〇）九月一日没、二十七歳。二人の交渉の経緯は不明確だが、秋成の『万葉集』研究を聞き知った公則から直筆の下問あるいは批評があつたためと推測されており、寛政九年二月以降、門人の荷田信美が仲介者となつてのことと考えられる（なお、秋成は寛政十年に信美邸内に移り住んでいる）。

今取り上げるのは『文反古』に収められた秋成の書簡である。といつても、公則に宛てた手紙ではない。秋成は京都の公則の訃報を旅先の河内で受け取り、大きな衝撃を受けた。この手紙は、公則の遺族に宛てた第一便である。

またの便して

夢ならばやと思ふには、はたゆめならざりけり。難波までも、足なえたれば、かき荷はれて出侍りて、ひとりごたるる。

かからむと思ひ知らねばしばしとて告し別れぞながき別れに

なかなかに都は遠し追しかむ君しばし待てよもつ坂路に

此春賜ひし、逍遙院殿の、御手づから合せたまひし、やま人、黒方の二くさを、上包みに御筆してかいつけ給ひしを、ここにもて来たりしままに、御手向草に、くゆらせ奉るなへに、

をしからぬ君がみたために燒昇すけぶりがへしのうたでくもあるか

又翁が兼てもたる、めう香五くさに、くはへて奉る、

名残袖

ひるまなき君に別れのなみだ川けふぞなごりの袖はくちぬる
はた手

ゆふごとに立出てみるいこまやま雲のはたてを面影にして

八木

神まつる称宣ねぎがささぐるしらげよねしらげいとはぬ君にませしを

無名

久かたのあまつ使の名なし雉ねなき悪しとも知らで別れし

老木芽

名もつらし片枝はつかにめはる木を花とみられん老が身のする

記しとどむるも、なかなかにうたて侍る。はかなりつる事ども申契り奉りしを、追つきて御まのあたりして、
かきくどき、かつは御心の限りをも承るべく、あなかしき。

切々たる秋成の心情が伝わつてくる書簡である。夢であれかしと願つても、公則の逝去は厳然たる事実であつた。
老いて視力が衰え、足元も覚束ない秋成は、京都どころか難波まで出るのもやつとの状態であつた。「からむと思ひ
知らねばしばしとて告し別れぞながき別れに」は、秋成が八月半ばに京都を発つ時に公則の体調が優れないのは知つ

ていたものの、まさか永遠の別れになるとは思わず、すぐに帰るから、と軽い気持ちで別れたのに、と千々に乱れる悲しみの心を歌つた歌である。

「なかなかに都は遠し追しかむ君しばし待てよもつ坂路に」は、少し解説を要する。秋成は六十八歳の天寿を信じていたが、この寛政十二年はまさにその前年、秋成六十七歳であった。正月に一つ年を取る、と考えていた江戸時代、秋成はあと数ヶ月でこの世を去るかもしれない、と覚悟を決めていた時期である。秋成が自筆の『万葉集』などを公則に譲渡したのも、若く優秀な公則が自己の学問を受け継いでくれるかもしれないと期待を掛けてのことであつただろう。しかし公則は既に黄泉に旅立つてしまつた。「なかなかに都は遠し」とは、公則のいない京都など却つて遠く感じられる、公則の待つ黄泉路の方が自分には慕わしい、というのである。「追しかむ」は「追い付く」の意で、私も間もなく黄泉に向かいますから、どうかよもつ平坂でしばしお待ち下さい、というのである。

続けて、逍遙院殿（三条西実隆）調合の「やま人」「黒方」という二種の薰物を公則自ら上書きして下された、その貴重な香を靈前の手向けとして薰らせつつ、「をしからぬ君がみために焼昇すけぶりがへしのうたてくもあるか」の歌を詠んだという。「貴重な香も、あなた様のためなら惜しくない、でもこうして漂つていく煙に、はかなく散つたあなた様が思い出されてつらい」というのである。

次の五首は連作である。秋成手持ちの妙香五種の名前に言寄せ、五首を奉つたのである。まず第一首目は「名残袖」と題して「干る間なき君に別れのなみだ川けふぞなごりの袖はくちぬる」。これは、「君に別れた悲しみの涙が川のように流れで乾く暇もない、そしてついに今日、ずっと涙に濡れ続けた名残の袖は朽ちてしまった」という。

第二首目は「はた手」と題し「夕方に立出でみるいこまやま雲のはたてを面影にして」と詠む。「夕方になる度に立ち出て見る生駒山よ、雲の果てにあなたの面影を見て」という意であるが、雲が棚引く山の風景は秋成滯在中の河

内、生駒山の実景である。また、「夕」と「雲のはたて」の語からは、『古今集』四八四番歌「夕暮れは雲のはたてにものぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて」（夕暮れは雲の果てに物思いをする。天の上なる人を恋しく思つて）を踏まえていることは明らかで、天に昇つてしまつた公則の面影をそこに見ているのである。

第三首目は「八木」と題し、「神まつる祢宜がさざぐるしらげよねしらげいとはぬ君にませしを」と詠んでいる。「八木」を「米」と見なして「しらげよね（精米）」を詠み込むのだが、そもそも伝統的な和歌の世界では「しらげよね」という語を用いるのは異例のことであり、他に用例を見ない。次章で触れるが、河内は農村であつた。のどかな農村に身を置き、間近に生駒山を眺めながら公則を偲ぶ、まさに秋成ならではの詠みぶりであり、蘆庵の「ただこと歌」の実践がここにも見られる。一首の意味は「祢宜が神に捧げる精米のび」とく、擦り磨くことを惜しまぬ（努力を惜しまぬ）君だったのに」ということであろう。

第四首目は「無名」の題で「久かたのあまつ使の名なし雉ねなき悪しとも知らず別れし」と詠む。これは天稚彦の神話を踏まえている。天稚彦が地上に遣わされたまま復命しないので、神々が様子を探るために地上に雉を遣わしたところ、天稚彦は天探女の「此の鳥はその鳴く声甚悪し、故身ら射よ」（『古事記』）との進言に従い、「無名雉」（『日本書紀』）を射殺した、という伝説である。和歌は「天からの使いの名無し雉が、声が悪い（そのために二度と天に戻れない）とも知らないで、何の気なしに別れててしまったよ（一度と会えなくなるとも知らず、雲の上人である公則のお側から、何の気なしにこの地上に来てしまつた）」の意であろう。

最後の第五首目は「老木芽」と題し「名もつらし片枝はつかにめはる木を花とみられん老が身のすゑ」と詠む。老木芽という、片枝にわずかに芽が張る老木（片目しかみえない老いた自分）を揶揄するかのような名前に辛い気持ちを抱く、というのであろう。若くして花を散らした公則に対し、老い先短い自分がなお花を咲かせている、やるせな

い気持ちを表明しているのである。

以上、公則を失った秋成の悲しみの和歌連作を見てきたが、ここからは逆に、生前の公則と秋成がいかに心ゆく交流を持っていたかが浮かび上がつてくるように思われる。身分差も年齢差も超えた、類い希な優雅な交流が二人の間にあつたと思われるるのである。

四、河内での秋成

先に河内の話題が出てきたので、次に河内での秋成について見ていくたい。この地で、味わいのある和歌が多く詠まれている。

取り上げるのは『山霧記』である。これは寛政十年（一七九八）五月二十日余から七月末まで、河内国日下の唯心尼宅に滞在した日々を日記風に綴った作品である。その前年、秋成は旧知の唯心尼を妻瑚璉尼（たま）と共に訪問、旧交を温めたが、その年の暮れに妻は急逝、さらに翌年四月には視力までも失つた。この旅は、悲しみの中にある秋成を慰めるため唯心尼が河内に招いたものと思われ、秋成は唯心尼の一族である森公達（きんみち）や河澄常之ら、地元の名士たちと風雅の交わりを結んだ。

唯心尼は河内国日下郷の豪農、足立氏である。大坂の富裕な商家、平瀬助道に嫁ぎ、堂島時代の秋成とは家族ぐるみの親交があつたが、三十代で夫と子を亡くし、故郷に帰つて尼として過ごしていた。父方の祖母は日下の庄屋、同じく豪農の森家の出身で、田園詩人として知られる生駒山人は祖母の甥に当たり、祖母にとれば実家の跡取りである。また生駒山人は唯心尼の父の姉と結婚しているので、唯心尼にとつては伯父に当たる。唯心尼自身も豊かな教養を持ち、晩年の秋成を精神的・物質的に支えた。

さて、まずは京都を旅立つ日の、蘆庵とのやりとりから見ていこう。

此度出たたん日、蘆庵の翁が馬のはなむけしに來たまひて、何くれと別れををしみて、

今よりはおほにしも見じいこま山ふもとの里に君が住まはば

生きては帰らじとやおぼしけむとも、おしはかられてぞ、

住はてぬ里にしあればいこま山常ゐる雲をおほにだも見よ

と答へぬ。

蘆庵が秋成に「今よりはおほにしも見じいこま山ふもとの里に君が住まはば」という餞別の和歌を送つてくれた、という。「これからはあだやおろそかな気持ちで見ますまい、生駒山を。その麓の里にあなたがお住まいなら」という意で、『万葉集』三〇三三番歌「君があたり見つもをらむ生駒山雲なたなびき雨はふるとも」などに見られる如く、人を思いつつ生駒山を遠く望む、という詠み方は常套である。これに対し秋成は「生きては帰らぬとでも思つてているのか」と悪態をつきつつ、「住はてぬ里にしあればいこま山常ゐる雲をおほにだも見よ」(ここにずっと住み続ける訳ではないので、どうか気楽に生駒山の雲を眺めてください)と返している。

河内での風雅な日々の合間にも、秋成は蘆庵に手紙を送っている。小沢蘆庵自筆『六帖詠藻』秋八を見てみよう。

余斎翁より

かふちのくにてよめる

いゝま山かげまだ峯にわかれぬをなにはの海は月になりけり (9221)

かへし

いゝま山山かげながら月になるなには入江を見る心ちする (9222)

ゆかねども見る心地するいのにはいとじあはまくほしき君哉 (9223)

秋成の和歌はわかりにくい。伝統的な和歌において「峰に分かれる」のは、例えば「風吹けば峰にわかるる白雲」のたえてつれなき君が心か」(『古今集』601) や「春の夜のゆめのうき橋とだえして峰にわかるる横雲の空」(『新古今集』38) に見られるように、普通は「雲」である。しかし秋成の和歌には「雲」の語はなく、何が「峰に分かれ」ないのか、理解しにくい。そこで蘆庵の一首目の和歌を先に見てみると、上句に「いゝま山山かげながら月になる」とあり、「山陰」であるのに「月になる」という。そして「月になる」は下句にかかり、月になつた「なには入江」を見る心地がする、というのである。この歌を手掛かりにすると、秋成の和歌は、「今私がいるのは生駒山の山陰で、いゝまからはまだ月影は峰を離れず見えないが、眼下に広がる浪華の海は早くも月に照らされて光り輝いている」というようく読み解けるのではないか。つまり、「かげ」は「山陰」と「月影」との両方にかかりてゐるのであり、その「心あまりて言葉足らず」な表現を、蘆庵は「いゝうしう」とか」と分かりやすく詠み直し、そして「ゆかねども見る心地する」とのはにいとじあはまくほしき君哉」、その地にいない私にもありありと情景が目に浮かぶこの和歌に、ますますあなたに会いたくなつた、と返しているのである。当時、秋成の和歌が理解されず悪口を言われたというのもわからぬではない、ある種一人よがりの和歌であるが、そのあふれる思いを蘆庵は的確に理解してくれるのであり、蘆庵に限りない信頼の念を持っていた秋成の気持ちもわかる気がする。

さて、このようなわかりにくい和歌であるが、じつは実景に基づいていると思われる。以前、河内日下に秋成関連の史跡を調査したことがあるが、山の手を見れば目の前に霧にけぶる生駒山が迫り、目を転すれば四天王寺あたりまで一望できる広大な平野が眼下に広がる。そしてまた古代史の舞台として、秋成の強い関心を引いた土地でもあつた。古代には平野の内側まで海が深く入り込み、まさに「河内」の字の如く水の豊かな土地であった。近世期には幕府が大和川の付け替えなどの大工事を行い、水の管理に努めたが、それでもしばしば洪水が引き起こされている。鴻池新田などはまさに当時の新田開発で出来た土地であり、いくつかのため池もあつた。秋成はこのような土地に滞在していたのである。生駒山の山懷に抱かれ、遠く広がる海が光輝くのを見て、この和歌を詠んだことであろう。

その河内日下での日々を描いたのが『山霧記』である。今、谷水の走る山村の風景が描かれる冒頭部を見ていこう。

田畠にそぞぐ山水の音も、ささやかにのみ成ゆく。我すむ垣の外面に、俄に松風のさやぐとぞ聞ゆるは、あらで、此谷水の走流るるなりけり。此岡のべに、御所の池とて心広くほりたるが、夏は必ず田に灌ぐが、この垣もとを過て、をちこちにみくまりすなりと也。この池は、いにしへ慶安の比、大坂の在藩曾我丹波守殿と申せしがほらせて、森の家に領ぜさせし由也。千町の田はた是にやしなはれて、百五十余年こなたの国津宝となん成ぬることのかたじけなさよ。守はわらは病して、森の家のやどりながらに終られしとや。かの家の園池、又、河澄の家をもつらねて、この君の造られしとや。鳴鶴園の記は、去年のまらふどぶりに、書てあたへつ。唐ざまなるは」とにきたな氣なるを、今は取かへさまほしきも、いかにせん。

聞こえてくるのは、さやかなる水音。曾我丹波守によつて御所池という用水池が造られ、ここから流れてくるので

ある。この用水池は森家が管理していて、これにより水の管理が行き届き、村は長く恩恵を蒙っているという（この曾我丹波守はその遺徳が慕われ、現在も水神として祀られている）。曾我殿は病を得て、この森家で息を引き取った。この森家と河澄家の園池は曾我殿が造つたものであるという。森家、河澄家というのはこの地の二軒庄屋であり、森家は先ほど申し上げたように唯心尼の一族と言つてよい。

さて、ここに『鳴鶴園記』の書名が登場する。これはこの滞在の前年、生前の妻と共に訪問した際、森家の人々に大変世話になつたことに感謝し、「唐ざま」（漢文）でその園池の素晴らしさを謳つた作品である。「きたな氣」、すなわち不出来だから取り返したいぐらいだ、というが、秋成はもともと漢文はあまり得意でなかつたようである。なぜわざわざ漢文で書いたかと言えば、やはり森家ゆかりの生駒山人に敬意を表してのことである。『鳴鶴園記』は從来知られていたのは河澄家蔵の作品のみであったが、近年、森家の一族の方ご所蔵の作品が明らかになつたので、後ほど画像でお見せしたい（画像、略）。また、森様がこの場において下さつていて、感謝申し上げるとともに、皆様にご紹介申し上げる。

さて、河内の話題の最後に、この山村の生活を生き生きと歌つた白筆短冊（東大阪市教育委員会所蔵）を見ていきたい。

おとたつる時雨も知らでいな扱^ハきの夜声にぎはふ冬の山ざと

時雨と言えば、晩秋から初冬にかけてのしみじみとした情趣を醸し出す言葉であるが、この時雨を詠み込んだ和歌において、聞こえてくるのは時雨の音ではなく、健康的な人々の声である。収穫の喜びにあふれる冬の夜、聞こえて

くるのは稻扱き歌か、弾む会話か。この和歌もやはり通常の和歌から見れば破格であるが、この地に根を張つて生きる人々の素朴で力強い姿をありのまま捉えた、秋成らしい歌であると思う。

五、秋成の俳諧

次に俳諧を取り上げる。秋成は十代から俳諧を嗜んでいたが、後年は離れたこともあり、あまり研究が進んでいない。特に解釈や内容の吟味はほとんど手付かずで、今、私どもが科研でチームを組んで取り組んでいるところである。今、その成果の一端を紹介しつつ秋成の句を読み味わっていただきたい。

まず秋成の俳号について、従来、漁焉・無腸(ぎよえん)が知られていたが、近年、「青蕪」という号があつたことが報告された。「無腸」は蟹という意味の漢語である。秋成は自らを蟹に例え、自分の墓石もわざわざ蟹型の石を用意している。蟹は外側が堅い甲羅で覆われているが、中身は至つて柔らかい、すなわち、外面はいかにも気難しく人を寄せ付けないが、心は纖細で傷付きやすい自分と似ている、ということである。また蟹は横歩きし、目玉が上下するという特徴がある。つまり、世間に對して斜に構え、つい皮肉やからかいの言を弄してしまう素直でない性格や、目玉が突き出ている、現代風に言うと、つい上から目線で世の中を見てしまう悪い癖を、蟹に例えているのである。

秋成の俳諧は、当時の大坂騒壇の事情を記す洒落本『列仙伝』(宝暦十三年刊)の「俳諧部」に「一人武者」と評されている。特定の流派に属さない、独自路線で個性的な俳諧を詠む、ということであろうか。では、実際に秋成がどのような句を詠んでいたのか、具体的に見ていく。

最初に挙げたのは、秋成最晩年に書かれた自選句集『俳調義論』(文化六年成)にある、近世の俳諧における三つの流派の物真似である。

擬柿園、梅翁、蕉翁三体

鶯の酔いともきくや梅の伽羅

梅やなぎのうのうあれに御たちある

あだし野や此孤屋^{ひとりや}に菊を売る

「柿園、梅翁、蕉翁三体に擬す」とあるが、柿園は松永貞徳、梅翁は西山宗因、蕉翁は松尾芭蕉、それぞれ貞門、談林、芭風のリーダーで、各々の句に似せて詠んだ句、ということである。まず最初の貞門風の句、「鶯の酔いともきくや梅の伽羅」。貞門は上品で、縁語や掛詞などの言葉遊びを特徴とするが、この句も「鶯」と「梅」、「梅」と「酔い」（すっぱい）、そして「聞く」と「伽羅」が縁語と思われる。伽羅は香木であるから「香りを聞く」、いわゆる聞香^{もんこう}である。意味が取りにくいが、試みに解釈してみれば、「酔い」を垢抜けた通人の「粹」^{すい}にとりなして、「鶯は粹人とも聞くが、粹ぶつて梅の香を伽羅と聞き分けたものの、すっぱい梅の味を思い出した」とでもいうところか。次は自由奔放な談林風、「梅やなぎのうのうあれに御たちある」。まさに謡曲調で、これぞ談林という詠みぶりである。そして芭風、「あだし野や此孤屋に菊を売る」。この芸術的で端正な詠みぶり、いかにも芭蕉らしく、思わず笑みを誘われる。声帶模写ならぬ詠風模写とでも言つたところであろうか、俳言の使い分けも含めて、実によくそれぞれの流派の特徴を把握して物真似している。秋成の器用さが窺える。

次に追悼句を見てみる。秋成の句を端から読んでいるが、追悼句の美しさが際だつていて、いくつか紹介したい。まず最初は、大和路で亡くなつた亀文という人物を悼んだ句である。

短夜にながき夢殿籠哉 〔『亀文追善集』〕

「短夜」と「長き」とが対句になつてゐる。夢殿は奈良の法隆寺東院の本堂であるが、「夢殿籠」の語に、人生ははない夢のようだという想いが込められていよう。

次は、与謝蕪村を語る際に枕詞のように歌われる秋成の蕪村追善句、「かな書の詩人西せり東風吹きて」である。

東風凍を解日、或人の許より、洛の蕪叟の訃を告来る。我此叟の俳諧、天の下にとどろくを知れれば、時々
得て読に、實に当世の作者也。然に其句々の麗藻なるや、其文の洒落なるには相似ぬものにて、うちよめば
唯から哥を女文字して書いつけたるさましたるは、むかし蕉窓にゐぐくまりて杜律をうまく讀、笠着てわら
ぢはきながら山家を懷にしたる人の一すぢの教なるべし。王母が鍋を霰のうつといひ、牡丹を天の一方にと
いふは、其語勢をまねび出たるものよ。又釣の糸に秋風を悲しひ、花茨しげけき路に古さどをおもふは、
その意旨をやうつしなせるならむ。是やかむ名のからうたともいふべくと、時々人にもかたりあひき。今や
老さりて終をよくせられしをうらやみ、かつ其麗藻をしみつつも、

かな書の詩人西せり東風吹て 〔『から繪葉』〕

前書きにも「から哥（漢詩）を女文字（仮名）して書いつけたるさましたる」「是やかむ名のからうたともいふべく」と繰り返し述べられる如く、漢詩人でもあつた蕪村の発句の格調高さを見事に言い止めていると言つていいであろう。

「むかし蕉窓に……山家を懷にしたる人」は芭蕉を指し、波線部の蕪村の四句は、それぞれ「玉霰漂母が鍋を乱れ打つ」、「広庭の牡丹や天の一方に」、「かなしさや釣の糸ふく秋の風」、「花いばら故郷の路に似たるかな」を言うと思われるが、これらの句がそれに芭蕉の句の姿や心を写し取っていると、高く評価している。秋成の鑑賞眼もなかなかのものだと思う。

次は茶裡（三世十甫齋）に対する追善句である。

追善

琴をさく斧にちからも涙かな（俳諧奈類仏）

『列子』「湯問」の「断琴」の故事を踏まえる。すなわち、琴の名手伯牙の弾く曲をその友人鐘子期はよく理解していたが、鐘子期の死後、伯牙は自分の音樂の神髓を理解してくれる人がいなくなつたことを歎き、琴の弦を切つて、二度と弾くことはなかつた、という故事に拠り、また「涙」に「無し」を掛けて、茶裡という「知音」を失い悲しみの余り琴を割こうとするが、斧を振り下ろす手にも力なく、涙にくれることだ、というのである。

最後に紹介する追悼句は、西鶴の師でもあつた梅翁、西山宗因の百回忌に手向けた句である。

梅翁百稔忌

目を閉てあいてまた観るさくらかな

これは宗因の代表句、「ながむとて花にもいたし頸の骨」を念頭に置いていると思われる。そして宗因のこの句は、西行の「ながむとて花にもいたく馴れぬれば散る別れこそ悲しかりけれ」を踏まえている。秋成の句は、桜の木の下で宗因を思い、目を閉じて祈りを捧げ、再び目を開けて桜に目を凝らし深く宗因に思いを致す、という意味であろうが、西行の和歌、宗因句、秋成句、と順番に読み味わっていくと、何か風流に繋がる一本の筋を見る思いがする。さて、秋成は芭蕉についてどのように思っていたのであろうか。しばしばその芸術家然とした態度を茶化すような言辞を弄する秋成であるが、その一方で芭蕉を意識した句も詠んでいる。

近道を飛歟鳥もしはす空

（→何に此師走の市にゆくからす　芭蕉『花摘』）

何人ぞ来ては鵜川をかなしがる

（→面白うてやがて哀しき鵜舟かな　芭蕉『曠野』）

花の陰乞食わすれぬたび寝かな

（→花の陰謡に似たる旅寢哉　芭蕉『曠野』）

一句目は、慌ただしい年の瀬、混雑しているであろう市中に向かつて飛んでいく鳥を詠んだ芭蕉の句に対し、「忙しい師走、鳥も近道するのか」とユーモラスに詠んでいる。二句目は、鵜飼船を題材に哀愁に満ちた一句を詠んだ芭蕉その人を茶化しており、三句目も、芭蕉句の中七を入れ替えただけであるが、やはり乞食の境涯に身を置いて俳諧に精進する芭蕉の行為それ自体に視線が向いている。いずれも芭蕉をからかう気分に満ち満ちてはいるが、芭蕉の句の芸術性そのものについては必ずしも否定してはいないようと思われる。

ついでながら、その他の句もいくつか挙げてみたい。

人はいさ貴様はやはり梅の花

妬ねたもかや人のうしろにあふひ草

あなかまと青梅ぬすむきぬの音

うぐひすが背やすり逃げん餅のかび

桜／＼散て佳人の夢に入

「人はいさ貴様はやはり梅の花」は、『古今集』の有名な和歌「人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香に匂ひける」(42)を踏まえ、梅に「やつぱりお前さんは普通だね、梅の花よ」と擬人化して呼び掛ける、親しみやすくも俗な詠みぶりである。「妬もかや人のうしろにあふひ草」は、言うまでもなく『源氏物語』「葵」巻、車争いの場面を踏まえていよう。賀茂祭の折り、葵上と六条御息所が車争いをして、六条御息所が後ろに追いやられるという屈辱的な仕打ちを受けた、その場面を詠んでいるのだと思われる。

次の「あなかまと青梅ぬすむきぬの音」は、「あなかま」という古語と衣擦れの音に、王朝の女性の面影が見て取れよう。そこに「青梅」、一体どういう場面であろうか。実はこの句は、読書会で、解釈が付かないと評された句で、私がひねり出した解釈は一笑に付された。小説専門の私から見ると、青梅、酸っぱい、そして人目を避けて青梅を取ろうとする女性とくれば、これは密かに身籠もった女性の姿をユーモラスに描いているとしか思えない。これはほとんどの散文、あるいは雑俳の世界であるが、いかがであろうか。

次の「うぐひすが背やすり逃げん餅のかび」は、ちょうど正月も明け、鶯の初音が待たれる頃、そろそろお餅には緑色のカビが生え始めた、鶯が羽を擦り付けて逃げたのか、というのである。風雅の代表のような鶯もさんざんな言

われようである。

しかし、こんな俗っぽい句ばかりではない。締めくくりは秋成の代表作、「桜さくら、散りて佳人の夢に入る」である。桜が散っているのは夢かうつつか、まどろむ美しい女性にはらはらと散りかかるのだろうか。どちらえどころのない、幻想的で美しい句だと思う。

六、終わりに

以上、駆け足で、とりとめもなく秋成作品の面白さを語ってきた。小説、和歌、俳諧、形はさまざまであるが、このとりとめのなさ、多様性こそ、秋成の文藝の一番の魅力ではないかと思う。

人生に苦悩する深刻な秋成だけでも、笑いを志向する毒舌家秋成だけでも、秋成を十全に理解したことにはならない。素直に、その両方の世界を含み込んだ秋成の全体像を理解する必要があると思う。また、軽妙洒脱な文章を綴る一方で、透明感のある硬質な文体も生み出していく、自由自在な、闊達な表現の世界、これこそが秋成の持ち味ではないだろうか。語りたいこと、表現したいことに応じて、文の形が定まる。ある時は散文、ある時は和歌、ある時は俳諧、その折々に、自分の表現したいことに最もふさわしい形を選んで、自在に言葉を紡ぎ出して行く、それが秋成の文学の営みであろうと思う。

以上、見てきた秋成の文芸の特徴を敢えて三つにまとめてみれば、次のようになろうか。

- ①明るい笑いと、そこに込められた毒
- ②雅と俗の往還
- ③書く喜びと相反する罪悪感

学問の対象として古典作品をきちんと理解しながら、同時にそれと戯れる。雅と俗とを自在に行き来しながら、その落差からくる笑いを楽しみ、また時にはそこに密かに毒を込めて現実社会を批判する。しかし、そのような営みを行う自分自身は、親に捨てられ、そんな自分を大切に育ててくれた養家の家産を傾けてしまった（これは当時の町人倫理としてはあり得べからざることであり、最大の不孝であった）、この世に何ものも為さない、不甲斐ない存在でしかない。そうと知りつつ、それでも尚、ものを書く魅力から離れられない。こういった点が秋成の文藝の大きな特徴だと思われる。

そして、この秋成の文藝を特徴づける要素が、『癪癖談』にすべて見出せる。つまり『癪癖談』は、気難しく、しかしうまいモアがあり、繊細で傷つきやすい秋成その人を彷彿とさせる作品、言うなれば、いかにも秋成らしい作品といふことが出来よう。それゆえに、門人たちは十三回忌に秋成を偲ぶよすがとして、晩年の傑作『春雨物語』ではなく、この『癪癖談』を選んだのではないだろうか。秋成周辺の親しい人々は、こういった秋成の等身大の姿をよく知り、その人となりと作品を愛していただと思われる。

今回の講演で、こういった秋成が織り成す言葉の世界の奥行き、面白さの一端を少しでもお伝えできたなら嬉しく思う。

（駒澤大学教授）

〔付記〕

○第一章より第四章は、次の各拙稿に基づきつつ、新見も加えて再構成したものである。「物語の変容——『癪癖談』の位置——」、「大坂騒壇の中の秋成——泰良と秋成——」、「秋成歌集『秋の雲』考——冒頭部における諸問題——」、「秋成發句「けふぞたつる中納言どのゝ粥柱」考——正親町三条公則と秋成——」（以上、拙著『上田秋成新考——くせ者の文学——』（ペリカン社、二〇一六年）所収）、「秋成・唯心・生駒山人——『鳴鶴園記』の世界——」（『上方文藝研究』13、二〇一六年六月）、「秋成資料紹介——『鳴鶴園記』の世界・続——」（『上方文藝研究』14、二〇一七年六月）。

○第五章は、JSPS科研費（課題番号 JP16K02418）基盤研究（C）「上田秋成の俳諧研究のための資料整備と基礎的研究」による研究成果の一部である。